

『十里霧中』

——息子たちのイギリス公立校体験記(1)——

豊田 一秀

自分の体力に限界を感じて、幼稚園の教師を辞めて早一年が過ぎた。私は今、学生としてイギリスに暮らす身である。未知の地に家族四人で住み始め、笑いと涙の日々のスタートであった。その中から今回は十五歳と十三歳になる二人の息子たちの学校について、入学の依頼から日々の生活まで、少し振り返って述べてみたいと思う。イギリスの学校についての本は、学術的なもの体験記的なもの、それぞれ

多く出版されているが、今回は限られた内容になるのは承知の上で、私共が実際に体験した事を中心に話を進めてみたい。

九月からのイギリスの新学期に備えて子どもたちの学校を探し始めたのは、渡英前の五月の下旬ぐらゐからであった。私の行く大学以外には住むところさえ決まっていなかったのであるから、それは全く雲を

攪むようなことであった。私は自分たちの住む家と子どもたちの学校を探すべく、一人でイギリスへ二週間程旅立った。探す手順として、まず私が車で大学に通える範囲にある中学校を探し、次にその学校に子どもたちが自転車を通える範囲に貸家を探すと

いう順序でことを進めることにした。学校の選択肢として日本人学校か現地校か、現地校でも公立か私立か、というように考える要素は多いのだが、せっかくイギリスに来たのであるから、最初から日本人学校に入れることは考えなかった。そこで、現地の公立にするか私立にするかという点に絞って考えてみた。しかし、資料を少し集め出してみて、さほど選択の余地は残されていないことにすぐに気が付いた。私たちであった。私立学校の月謝が高いのである。私立といっても様々ではあるものの、高い学校になると一学期の月謝が通いで三千ポンド以上、寮だと四千ポンドにもなってしまうのだ。円に直せば一年間で、通いで約百三十万、寮で約百七十万円位

になろうか。二人分のことを考えると、これはどう逆立ちをしてみても無理である。もちろん語学力を含めた子どもたちの学力の問題も考えねばならず、ある意味で自然に学校は絞られてきたと言えよう。現地の公立校である。

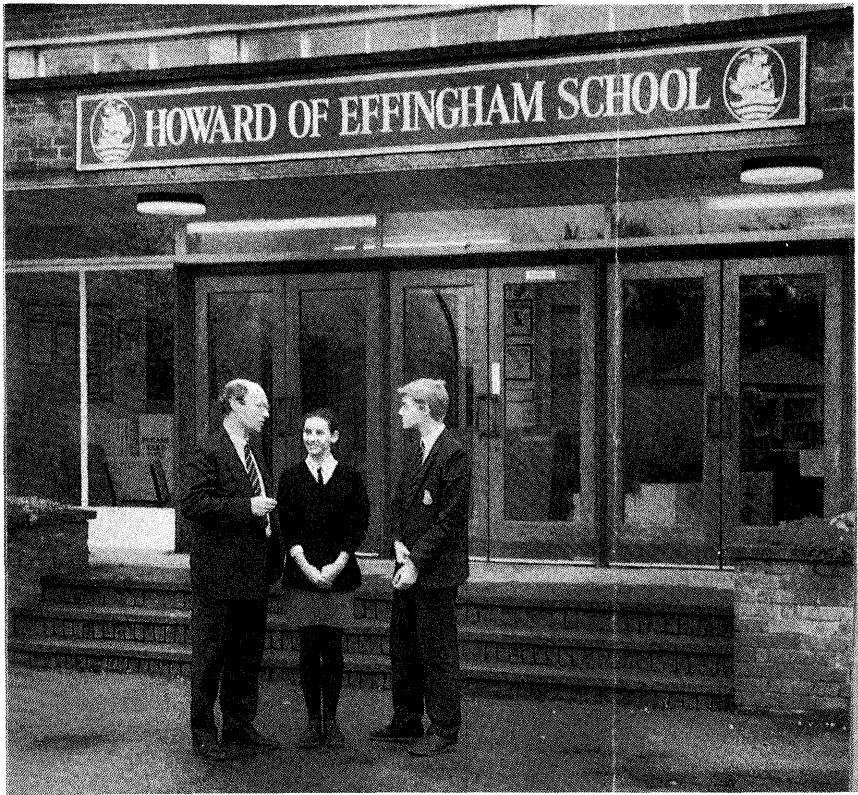
イギリスの学制は日本と少し違っているのだが、あえて日本流に言うなら十六歳までが義務教育で、十一歳から十六歳までの五年間を中学校に通う（セカンダリースクール）。その後、高校（シックスフォーム）に通う場合は二年間である。イギリスでは政策上、日本で言えば中学と高校を合わせたようなコンプリヘンシブスクールという七年制の公立校が近年多くなっている。

息子たちの学校を考えたとき、中学から高校へはエスカレーターというわけではないが、同じ学校に長く学べる利点もあるかと考え、このコンプリヘンシブスクールを探すことにした。問題はどの学校がいろいろの意味で良いかということである。これに

は在校生やその父母、卒業生や地域の人たちによる、いわゆる口コミが重要であるが、二週間ばかり滞在している外国人の手に負えるものではない。仕方がないので、毎年秋に新聞に発表される公立、私立を合わせた、一種の共通試験の成績ベスト千校のリストを参考にすることにした。試験の成績の良い学校が、本当の意味で良い学校なのかどうかは、はなはだ疑問ではあったが、これしか判断の資料がなかったのである。二校ばかりを選んで、実際に足を運んでみることにした。失礼を承知で予約なしで訪問した私であったが、どちらの学校でも暖かく迎えてくれた。授業の事、クラブ活動の事、特に英語を外国語とする生徒への援助についてなど、話を聞くことができた。イギリスには大英帝国のなごりか、少し前までは英語を話せない子どものために、無料で入れる専門のクラス（ランゲージユニット）があったのであるが、御多分に漏れず財政の問題で廃止されてしまった経緯がある。

しかし、今日でもそのような子どもが在籍する学校には、週に何日か専門の先生が教えに来てくれるそうである。有り難いことであると感謝した。

地域の環境や校庭の広さなども含めていろいろと考え、そのうちの一枚に入学をお願いすることに決めた。公立であるから、入学の基礎的な資格は年齢と居住地区である。外国人の場合は、この他に両親がイギリスにいたことが条件となる。校長先生に一体どこに住めばこの学校に入りやすいのかと伺うと、親切な先生は地図を書きながら土地勘のない私に校区の説明をしてくれた。教育熱心なのはイギリスも同じのようで、評判の良い学校には入学希望者がその校区に引越してくるので、学校がどんどん大きくなってしまいうそうである。その学校も、もうすでに定員を越えていてキャンセル待ちの状態であったが、その学校に通う必然性の高い順に入学できるといふ話であった。すなわち学校に近い順といふわけである。私は学校の用務員室にでも住みたい



▲学校の正面玄関で生徒と話す校長先生

ような気持ちであった。
しかし、実際に入学を許可するのは、学校ではなくて、日本で言うところの教育委員会なのだそう
で、その場所と担当者の名前を覚えてもらった。時間のない私は教育委員会にも、こちらの常識である予約もしないで行ったのだが、係の人はやはり嫌な顔もせずにかわってくれた。

そして私の希望を聞くと、公立校は地域の子どもを受け入れる義務があるのだから、近くに住みながらももしも受け入れら

れない場合には、地区の行政に直訴して学校の定員自体を増やしてもらうという「裏技」もあると教えてもらった。入学志望書をもらい、住む家の契約が出来たらすぐに郵送しなさいとアドバイスを受ける。

入学した後に分かったことであるが、普通は入学の前の年の十一月ぐらいから学校の説明会などが催され、一月か二月位にはおおよその入学者の予想がついているそうで、私が訪ねた六月というのは相当に遅かったのである。しかも定員を越した入学希望者がいるのであるから、予約もなしに、こんな時期に現れた外国人など門前で断わられても仕方のない状態であったと思う。それにもかかわらず、校長先生は私の子どもたちが入学できるような方向で考えて、教育委員会を紹介して下さったわけである。そして、また教育委員会でも親切に裏技まで教えてもらい、助けられた。この経験を通して、私はイギリスの懐の深さを強く感じさせられた。誰もが「外国

人」に慣れていただけでなく、弱者に寛大であった。

次に借家を探す苦勞があったのだが、今回の主題から外れるのでここでは省略する。結果として、学校まで自転車で十五分程で通える所に良い一軒家を見つけることが出来た。私が希望した学校、ハワード オブ エッフィンガム スクール (HOWARD OF EFFINGHAM SCHOOL) への入学許可が、教育委員会より日本に届いたのは七月の中頃であっただろうか。

拜むようにして封筒を開けた私であった。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

